



厚生労働省
群馬労働局発表
平成26年6月26日

担 当	雇用均等室
	室長 松本 春美
	厚生労働事務官 藤井 達也
	電話 027-210-5009

報道関係者 各位

群馬労働局における育児・介護休業法の施行状況

～労働者からの相談が増加し過去最多に～

平成25年度に群馬労働局雇用均等室で取り扱った育児・介護休業法に関する相談、紛争解決援助及び是正指導の状況は以下のとおりです。

《ポイント》

I. 全体の相談件数は減少するも、労働者からの相談件数は増加（過去最多）

相談件数 737件（前年度1402件 47.4%減少）

うち事業主 288件（前年度994件 71.0%減少）

うち労働者 221件（前年度126件 75.4%増加）

その他 228件（前年度282件 19.1%減少）

- 事業主からの相談は、改正育児・介護休業法が全面施行された平成24年度から大きく減少した。
- 労働者からの相談内容では、育児休業に関する相談が大きく増加した。

II. 労働局長による紛争解決援助（※）の申立件数が増加（過去最多）

申立件数 11件（全て労働者からの申立による。前年度6件）

※ 労働者と事業主との間のトラブルについて、当事者双方の意見を聴き、問題解決に必要な具体策を提示（助言・指導・勧告）することにより、トラブルの解決を図る制度。

III. 積極的な報告徴収の実施により、是正指導件数が増加

対象事業所 202社（前年度136社 48.5%増加）

是正指導件数 834件（前年度662件 26.0%増加）

- 内容としては、「育児短時間勤務」に関する指導が115件と最も多く、次いで「育児休業」に関する指導が88件であった。

【参考資料】

別添1. 労働局長による紛争解決援助事例

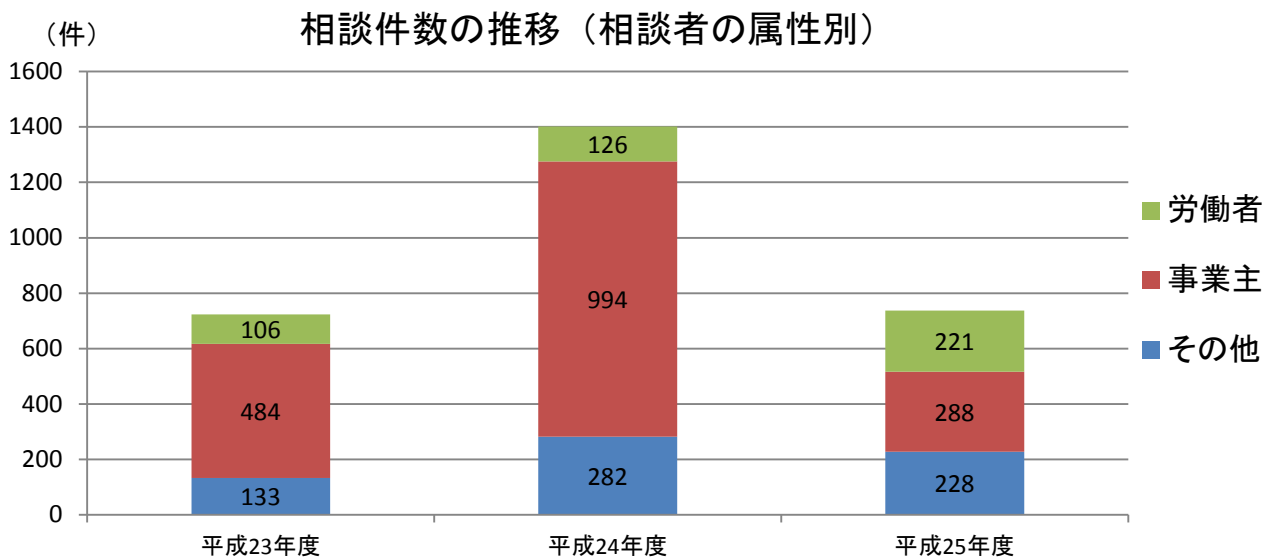
別添2. 男女雇用機会均等法 育児・介護休業法のあらまし

1. 相談の状況

- ・事業主等からの相談について、平成24年度は改正育児・介護休業法の全面施行（7月1日）の年に当たったため大きく増加したが、平成25年度は減少した。
- ・労働者からの相談件数は221件（前年度126件）と増加しており、過去最多となっている。

〔労働者からの相談の内容〕

- ・育児休業に関する事案が68件（前年度27件）と最も多く、「育児休業は取得させないと会社に言われた」「パートで働いているが、育児休業の対象になるか」等の相談が寄せられた。
- ・次いで、育児短時間勤務に関する事案が42件（前年度32件）であり、「育児短時間勤務の利用希望を会社に伝えたところ、そんな制度は無いと言われた」「就業規則に短時間勤務制度は記載されていないが、利用できるか」等の相談が寄せられた。
- ・次いで、育児休業に係る不利益取扱いに関する事案が27件（前年度21件）であり、「育児休業からの復職にあたり退職勧奨を受けた」「育児休業後はパート社員に変更すると会社から言われた」等の相談が寄せられた。



相談内容の内訳

相談項目	23年度		24年度		25年度		
	合計	うち労働者	合計	うち労働者	合計	うち労働者	
育児関係	育児休業に関する事案	137	23	186	27	184	68
	育児短時間勤務に関する事案	151	25	204	32	125	42
	育児休業に係る不利益取扱いに関する事案	24	21	36	21	43	27
	子の看護休暇に関する事案	59	5	102	4	62	23
	育児のための所定外労働の制限に関する事案	48	4	96	3	47	21
	育児休業以外に係る不利益取扱い事案	2	1	13	8	18	12
	育児のための時間外労働の制限に関する事案	41	2	91	4	25	1
	育児のための深夜業の制限に関する事案	29	2	93	7	26	3
	育児を行う労働者の配置に関する配慮に係る事案	3	3	6	6	5	3
	育児 その他	27	3	77	0	28	10
介護関係	介護休業に関する事案	48	7	112	7	51	5
	介護短時間勤務等に関する事案	41	2	92	1	28	1
	介護休暇に関する事案	48	3	105	5	47	4
	介護のための時間外労働の制限に関する事案	24	2	74	1	20	0
	介護のための深夜業の制限に関する事案	24	2	73	0	19	0
	介護を行う労働者の配置に関する配慮に係る事案	2	1	0	0	1	1
	介護 その他	15	0	42	0	8	0
合計	723	106	1402	126	737	221	

2. 労働局長による紛争解決援助の状況

- ・申立件数は11件（前年度6件）で、過去最多となった。
- ・申立の内訳としては、育児休業に関する事案が4件（前年度2件）と最も多く、次いで育児休業に係る不利益取扱いに関する事案が3件（前年度4件）となっている。

紛争解決援助の内訳

	23年度	24年度	25年度
育児休業に関する事案	1	2	4
育児休業に係る不利益取扱いに関する事案	3	4	3
育児短時間勤務に関する事案	0	0	2
育児休業以外に係る不利益取扱い事案	0	0	2
育児のための深夜業の制限に関する事案	0	0	0
育児 配置に関する配慮に係る事案	0	0	0
合計	4	6	11

3. 事業主への是正指導の状況

- ・育児・介護休業法第56条に基づく報告徴収を202社（前年度136社）に対し実施し、このうち201社（前年度135社）に対して834件（前年度662件）の是正指導を行った。
- ・是正指導を受けた事業所のうち、96.5%が是正済み（平成26年5月末日現在）。

是正指導件数の推移

		23年度	24年度	25年度
報告徴収を実施した事業所数		192	136	202
育児関係	育児休業	104	65	88
	子の看護休暇	100	59	55
	育児のための所定外労働の制限	26	38	57
	育児のための時間外労働の制限	95	52	78
	育児のための深夜業の制限	25	17	31
	育児短時間勤務	59	75	115
	育児短時間勤務等(努力義務)	138	111	60
	休業期間等の通知	0	0	1
介護関係	介護休業	57	28	49
	介護休暇	27	38	55
	介護のための時間外労働の制限	42	22	36
	介護のための深夜業の制限	25	16	29
	介護短時間勤務等	44	53	81
	介護短時間勤務等(努力義務)	0	1	0
	休業期間等の通知	0	0	0
職業家庭両立推進者	128	87	99	
合計	870	662	834	

労働局長による紛争解決援助事例

【事例 1】

● 期間雇用者の育児休業に係る事案

女性労働者からの申立内容



1年間の雇用契約を繰り返し更新し、7年勤務している。妊娠したため、事業主に育児休業の取得が可能か相談したところ、「非正規社員は育児休業制度の対象外」と言われてしまった。非正規社員が事業主の都合で雇い止めになったという話は聞いたことが無く、周囲の者も長期にわたって契約更新がなされている。育児休業を取得して継続勤務したい。

事業主からの事情聴取内容

当社の就業規則においては、期間雇用者は育児休業の取得対象から除外している。また、育児休業期間中は代替要員を確保しなければならず、もし育児休業を取得させたとしても、復職の時点で既に人手は足りており、余剰人員は抱えられない。



労働局の助言

子が1歳に達する日を超えて雇用関係の継続が見込まれる等の一定要件を満たした場合、期間雇用者であっても育児休業の対象となる。本件の対象労働者については一定要件を満たすと考えられるため、育児休業を取得させるよう助言。

また、育児休業中の代替要員を新たに雇う場合は、休業期間に対応した雇用期間とする等、育児休業からの復職を前提とした雇用管理が必要である。



結果

事業主が対象労働者の希望に沿った育児休業を認めることとなり、解決した。

参照条文

育児・介護休業法第5条（抜粋）

労働者は、その養育する一歳に満たない子について、その事業主に申し出ることにより、育児休業をすることができる。ただし、期間を定めて雇用される者にあつては、次の各号のいずれにも該当するものに限り、当該申出をすることができる。

一 当該事業主に引き続き雇用された期間が一年以上である者

二 その養育する子が一歳に達する日（以下「一歳到達日」という。）を超えて引き続き雇用されることが見込まれる者（当該子の一歳到達日から一年を経過する日までの間に、その労働契約の期間が満了し、かつ、当該労働契約の更新がないことが明らかである者を除く。）

【事例 2】

● 育児休業の取得を理由とする不利益取扱いに係る事案

女性労働者からの申立内容



正社員として勤務し、育児休業を取得しているが、事業主から「育児休業後は雇用期間を1年間とする契約社員に変更する」と言われた。契約社員になると基本給や賞与等が減額され、経済的な不利益が大きい。今まで育児休業後に本人の希望で契約社員に変更した人はいたが、事業主の都合で変更された人はいない。育児休業後も引き続き正社員として勤務したい。

事業主からの事情聴取内容

もともと経営状況が良くないため、対象労働者の所属部署の人員削減を検討していた。育児休業後は、子どもの体調不良等で急な休みも多くなることが予想され、出産前の正社員としての責任を負わせることは難しいことから、対象労働者を契約社員に変更したいと考えた。



労働局の助言

育児休業の取得を理由に、雇用形態を不利益に変更する等の取扱いは、禁止されている。本件については、経営状況の悪化が背景にあったとしても、対象労働者の雇用契約を育児休業後に契約社員に変更することは、不利益取扱いに該当するため、正社員として復職させるよう助言。



結果

事業主が、対象労働者の育児休業後も正社員として雇用することを認め、解決した。

参照条文

育児・介護休業法第10条

事業主は、労働者が育児休業申出をし、又は育児休業をしたことを理由として、当該労働者に対して解雇その他不利益な取扱いをしてはならない。

【事例3】

●育児休業の取得を理由とする不利益取扱いに係る事案

女性労働者からの申立内容



1年間（4月1日～翌年3月31日）の雇用契約を繰り返し更新し、5年勤務している。妊娠したため、子が1歳までの育児休業の取得希望を事業主に伝えたところ、了解を得た。しかし、その後、「人員削減のため今年度末をもって雇用終了とし、次期の契約更新はしない。育児休業も今年度末までとする」と言われた。次期の契約を更新し、子が1歳まで育児休業を取得して継続勤務したい。

事業主からの事情聴取内容

現在、経営合理化のために契約社員を削減し、正社員を増やす流れにある。今年度末には、数名の契約社員の雇用契約を更新しない予定であり、対象労働者に対して「契約を更新する確約はできない」という話はしたが、「更新しない」とは言っていない。



労働局の助言

育児休業の取得を理由に、期間雇用者の雇用契約を更新しないことは禁止されている。本件においても、対象労働者の契約更新の有無を決定する際は、育児休業の取得を不利益に考慮せず、能力や勤務成績等の公平な基準で判断するよう助言。



結果

事業主が、次期の雇用契約の更新にあたって、能力や勤務成績等の公平な基準で判断することとなった。その結果、対象労働者の雇用契約は更新され、子が1歳までの育児休業を取得し、継続勤務している。

参照条文

育児・介護休業法第10条

事業主は、労働者が育児休業申出をし、又は育児休業をしたことを理由として、当該労働者に対して解雇その他不利益な取扱いをしてはならない。

【事例4】

●育児短時間勤務制度の利用に関する事案

女性労働者からの申立内容



出産前は、通常勤務（日勤）の他、早出勤務と遅出勤務に従事していた。現在は育児休業中であり、復帰後は早出勤務と遅出勤務が難しくなるため、育児短時間勤務制度の利用を希望したが、事業主からは「短時間勤務は認められない。短い時間で働きたいのであれば、パート社員に切り替える」と言われてしまった。
正社員のままで、育児短時間勤務制度を利用したい。

事業主からの事情聴取内容

当該労働者は、急な休みが生じると業務に支障がある部署に勤務しており、早出勤務や遅出勤務ができないのであれば、子が落ち着くまでしばらくパートで勤務してはどうかと話をした。就業規則上は、子が3歳に達するまでの育児短時間勤務制度（午前9時～午後4時、休憩1時間）は整備している。



労働局の助言

育児短時間勤務制度は、労働者の申出があれば利用させる必要があり、制度の利用を理由にパート社員に変更する等の不利益取扱いは禁止されている。
本件についても、就業規則に定めた育児短時間勤務制度を対象労働者に利用させ、正社員の雇用形態を維持するよう助言。



結果

対象労働者は、正社員のまま、育児短時間勤務制度を利用できることとなり、解決した。

参照条文

育児・介護休業法第23条（抜粋）

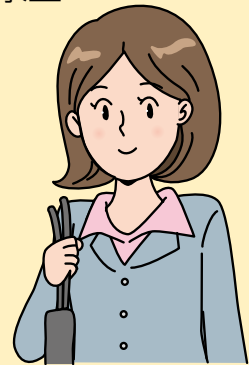
第二十三条 事業主は、その雇用する労働者のうち、その三歳に満たない子を養育する労働者であって育児休業をしていないもの（一日の所定労働時間が短い労働者として厚生労働省令で定めるものを除く。）に関して、厚生労働省令で定めるところにより、労働者の申出に基づき所定労働時間を短縮することにより当該労働者が就業しつつ当該子を養育することを容易にするための措置（以下「所定労働時間の短縮措置」という。）を講じなければならない。

男女雇用機会均等法 育児・介護休業法 のあらまし

目次

1 男女雇用機会均等法の概要…………… P1

- 1 雇用管理の各ステージにおける性別を理由とする差別の禁止
- 2 間接差別の禁止
- 3 女性労働者に係る措置に関する特例
- 4 婚姻、妊娠・出産等を理由とする不利益取扱いの禁止
- 5 セクシュアルハラスメント対策
- 6 母性健康管理措置
- 7 事業主に対する国の援助
- 8 派遣先への適用



2 育児・介護休業法の概要…………… P6

育児のための両立支援制度…………… P6

- 1 育児休業
- 2 短時間勤務制度
- 3 所定外労働の制限
- 4 子の看護休暇
- 5 法定時間外労働の制限
- 6 深夜業の制限
- 7 その他の両立支援措置
- 8 転勤の配慮
- 9 不利益取扱いの禁止

介護のための両立支援制度…………… P9

- 1 介護休業
- 2 短時間勤務制度等の措置
- 3 介護休暇制度
- 4 法定時間外労働の制限
- 5 深夜業の制限
- 6 転勤の配慮
- 7 不利益取扱いの禁止

3 紛争解決の援助等…………… P12

4 妊娠から産休、育児休業、復帰への流れ…………… P13



1 男女雇用機会均等法の概要

働く人が性別により差別されることなく、かつ、働く女性が母性を尊重されつつ、その能力を十分に発揮できる雇用環境を整備することは、法の下での男女平等の具現化とともに、少子高齢化が急速に進む我が国が経済社会の活力を維持していく上で、ますます重要な課題となっています。

男女雇用機会均等法は、職場における男女の均等取扱い等を規定した法律です。事業主と職場で働く皆様におかれては、この法律をご理解いただき、実質的な男女均等取扱いの確保に向けて、取り組みましょう。

1 雇用管理全般において、性別を理由とする差別は禁止されています（法第5条・第6条）

事業主が、男女労働者を、募集・採用、配置（業務の配分及び権限の付与を含む）・昇進・降格・教育訓練、福利厚生（※）、職種・雇用形態の変更、退職の勧奨・定年・解雇・労働契約の更新において、性別を理由に差別することは禁止されています。

（※）福利厚生の具体的な範囲は厚生労働省令で定められている次の4つの事項です。

- ①生活資金、教育資金その他労働者の福祉の増進のために行われる資金の貸付け
- ②労働者の福祉の増進のために定期的に行われる金銭の給付
- ③労働者の資産形成のために行われる金銭の給付
- ④住宅の貸与

<禁止される差別の例>

- 募集または採用に当たって、その対象から男女のいずれかを排除すること。
例えば：営業職は男性、事務職は女性に限定して募集すること。
社員を採用する際、男性は正社員として、女性はパートとして採用すること。
- 一定の職務への配置に当たって、その対象から男女のいずれかを排除すること。
例えば：男性は外勤業務に、女性は内勤業務に従事させること。
派遣元事業主が、労働者派遣の対象を男女のいずれかのみとすること。
- 一定の役職への昇進に当たって、その条件を男女で異なるものとする。こと。
例えば：女性のみ、一定の年齢に達したことを理由に一定の役職までしか昇進できないものとする。こと。
- 福利厚生の措置の実施に当たって、その条件を男女で異なるものとする。こと。
例えば：女性についてのみ、婚姻を理由として、社宅の貸与の対象から排除すること。
- 雇用形態の変更について、男女で異なる取扱いをすること。
例えば：経営の合理化に当たり、女性のみ正社員からパートへの変更を強要すること。
- 退職の勧奨に当たって、男女のいずれかを優先すること。
例えば：男性よりも優先して女性に対して退職の勧奨をすること。

2 間接差別について3つのケースが禁止されています（法第7条）

間接差別とは、「性別以外の事由を要件に、一方の性の構成員に他の性の構成員と比較して相当程度の不利益を与えるものを、合理的理由なく講じること」をいいます。厚生労働省令で定める以下の3つのケースが、合理的な理由のない限り、間接差別として禁止されています。

- ①労働者の募集または採用に当たって、労働者の身長、体重または体力を要件とすること。
- ②コース別雇用管理における「総合職」の労働者の募集または採用に当たって、転居を伴う転勤に応じることができるとを要件とすること。
- ③労働者の昇進に当たり、転勤の経験があることを要件とすること。

<禁止される間接差別の例>

①の例

荷物を運搬する業務を内容とする職務について、その業務を行うために必要な筋力より強い筋力があることを要件とする場合。

②の例

広域にわたり展開する支店、支社等はあるが、長期間にわたり、転居を伴う転勤の実態がほとんどない場合（家庭の事情その他の特別な事情により本人が転勤を希望した場合を除く）。

③の例

特定の支店の管理職に昇進するに際し、その職務を行う上で異なる支店での経験が特に必要とは認められないにもかかわらず、異なる支店における勤務経験を要件とする場合。

※省令で定める上記の3つのケース以外については、男女雇用機会均等法違反ではありませんが、裁判において、間接差別として違法と判断される可能性があります。

3 特例として女性の優遇が認められる場合があります（法第8条）

職場に事実上生じている男女間の格差を是正して、男女の均等な機会・待遇を実質的に確保するために、事業主が、女性のみを対象とするまたは女性を有利に取り扱う措置（ポジティブ・アクション、4ページ参照）は、法違反とはなりません。

※事実上生じている男女間の格差について、男性労働者と比較して、一定の区分、職務、役職において女性労働者の割合が4割を下回っている場合、格差が存在していると判断されます。

※女性のみを対象とするまたは女性を有利に取り扱う措置を講じるときは、これまでの慣行や固定的な男女の役割分担意識が原因で生じている状況を改善する目的が必要です。

なお、現に女性労働者の割合が4割を下回っている場合でも、単に女性を優先したい、有利に処遇したいという意図で措置を講じる場合には、法違反となります。

<女性優遇が認められる例>

【採用】 女性の応募を促すために、女性求職者を対象とした職場見学会を実施すること。

【配置】 配置のために必要な資格試験の受験を女性労働者のみに奨励すること。

【昇進】 昇進の基準を満たす労働者の中から女性労働者を優先して昇進させること。

<Q&A>

Q： 当社では会社全体で女性が少ないため、女性だけの支店を作ることを考えていますが、均等法に違反するのでしょうか。

A： 雇用管理区分ごとに見て、特定の職務又は役職に占める女性の割合が会社全体で4割を下回る場合に、ポジティブ・アクションとして、特定の支店における当該職務又は役職の従事者を女性のみとすることは、均等法違反とはなりません。

これに照らせば、特定の支店を女性のみとすることは、雇用管理区分ごとに見て、その支店内の職務又は役職すべてについて女性のみとすることが適法な場合のみ許容されることとなります。

したがって、会社全体ですでに女性が多くついている職務又は役職について、当該支店において男性を排除して募集・採用、配置を行うことは均等法に反することとなります。

※ 事業主の方におかれては、均等法違反となるか判断が難しい場合には、都道府県労働局雇用均等室（裏表紙参照）あてご相談ください。

4

婚姻、妊娠・出産等を理由として女性に不利益な取扱い等を行うことは禁止されています（法第9条）

事業主の以下の行為は禁止されています。

- ①女性労働者が婚姻、妊娠、出産した場合には退職する旨をあらかじめ定めること。
- ②婚姻を理由に女性労働者を解雇すること。
- ③厚生労働省令で定められている事由（※）を理由に、女性労働者に対し不利益な取扱いをすること。
また、妊娠中・産後1年以内の解雇は、事業主が、妊娠等が理由ではないことを証明しない限り無効とされています。

（※）厚生労働省令で定められている事由

- ①妊娠したこと。
- ②出産したこと。
- ③母性健康管理措置を求め、または受けたこと。
- ④坑内業務・危険有害業務に就けないこと、これらの業務に就かないことの申出をしたこと、またはこれらの業務に就かなかったこと。
- ⑤産前休業を請求したことまたは産前休業したこと、産後に就業できないこと、または産後休業したこと。
- ⑥軽易業務への転換を請求し、または転換したこと。
- ⑦時間外等に就業しないことを請求し、または時間外等に就業しなかったこと。
- ⑧育児時間の請求をし、または取得したこと。
- ⑨妊娠または出産に起因する症状により労働できないこと労働できなかったことまたは能率が低下したこと。

<禁止される不利益な取扱いの例>

- 解雇すること。
- 期間を定めて雇用される者について、契約の更新をしないこと。
- あらかじめ契約の更新回数の上限が明示されている場合に、当該回数を引き下げること。
- 退職の強要や正社員からパートタイム労働者等への労働契約内容の変更の強要を行うこと。
- 降格させること。
- 就業環境を害すること。
- 不利益な自宅待機を命ずること。
- 減給をし、または賞与等において不利益な算定を行うこと。
- 昇進・昇格の人事考課において不利益な評価を行うこと。
- 不利益な配置の変更を行うこと。
- 派遣労働者として就業する者について、派遣先が当該派遣労働者の勤務を拒むこと。

5

セクシュアルハラスメント対策が必要です（法第11条）

事業主は職場におけるセクシュアルハラスメントをなくすため雇用管理上必要な対策をとらなければなりません。

以下の9項目が厚生労働省の指針に定められています。

<雇用管理上とるべき対策>

- ①セクシュアルハラスメントの内容及びセクシュアルハラスメントがあってはならない旨の方針を明確化し、管理・監督者を含む労働者に周知・啓発すること。
- ②セクシュアルハラスメントの行為者については、厳正に対処する旨の方針及び対処の内容を就業規則その他の職場における服務規律等を定めた文書に規定し、管理・監督者を含む労働者に周知・啓発すること。
- ③相談窓口をあらかじめ定めること。

- ④相談窓口担当者が、内容や状況に応じ適切に対応できるようにすること。また、現実に生じている場合だけでなく、その発生のおそれがある場合や、セクシュアルハラスメントに該当するか否か微妙な場合であっても、広く相談に対応し、適切な対応を行うようにすること。
- ⑤相談の申出があった場合、事実関係を迅速かつ正確に確認すること。
- ⑥事実確認ができた場合は、行為者及び被害者に対する措置をそれぞれ適正に行うこと。
- ⑦再発防止に向けた措置を講ずること。事実関係が確認できなかった場合も同様の措置を講じること。
- ⑧相談者・行為者等のプライバシーを保護するために必要な措置を講じ、労働者に周知すること。
- ⑨相談したこと、事実関係の確認に協力したこと等を理由として、不利益な取扱いを行ってはならない旨を定め、労働者に周知・啓発すること。

6 妊娠中・出産後の健康管理に関する措置(母性健康管理)を講じることが必要です(法第12条・第13条)

事業主は、妊娠中・出産後の女性労働者が保健指導・健康診査を受けるために必要な時間を確保し(法第12条)、医師等による指導事項を守ることができるよう必要な措置を講じなければなりません(法第13条)

<女性労働者の母性健康管理に必要な措置>

- 女性労働者が妊産婦のための保健指導又は健康診査を定期的に受診するために必要な時間を、下記の頻度で確保できるようにすること。

【妊娠中】 妊娠 23 週まで	4 週間に 1 回
妊娠 24 週から 35 週まで	2 週間に 1 回
妊娠 36 週以後出産まで	1 週間に 1 回

※ただし、医師または助産師(以下「医師等」)が異なる指示をしたときは、その指示に従って、必要な時間を確保できるようにしなければなりません。

【産後(出産後1年以内)】

医師等が保健指導又は健康診査を受けることを指示したときは、その指示するところにより、必要な時間を確保できるようにしなければなりません。

- 妊娠中及び出産後の女性労働者が、保健指導又は健康診査を受け、医師等から指導を受けた場合、その指導を守ることができるよう、事業主は下記に示す勤務時間の変更や勤務の軽減等必要な措置を行うこと。
 - ・妊娠中の通勤緩和(時差出勤、勤務時間の短縮、交通手段・通勤経路の変更等)
 - ・妊娠中の休憩に関する措置(休憩時間の延長、休憩回数の増加、休憩時間帯の変更等)
 - ・妊娠中または出産後の症状等に対応する措置(作業の制限、勤務時間の短縮、休業等)
- ※医師等の指導がない場合や不明確な場合にも、女性労働者を介して主治医や産業保健スタッフと連絡をとり判断を求めるなど、適切な対応が必要です。

7 ポジティブ・アクションの取組を国が援助しています(法第14条)

男女労働者間に事実上生じている格差を解消するための自主的かつ積極的な取組(ポジティブ・アクション)を行う事業主に対して、国は相談その他の援助を行っています。

<ポジティブ・アクションとは?>

固定的な男女の役割分担意識や過去の経緯から

- ・営業職に女性はほとんど配置されていない
- ・課長以上の管理職は男性が大半を占めている

などの差が男女労働者の間に生じている場合、このような差を解消しようと個々の企業が行う自主的かつ積極的な取組をいいます。

<国の援助とは具体的にどんなこと？（平成24年度の事業）>

- ①経営者団体と連携して「女性の活躍推進協議会」を開催。
- ②「均等・両立推進企業表彰」を公募により実施し、ポジティブ・アクションを推進する企業を表彰。
- ③事業所から選任された機会均等推進責任者の活動を促すために、ポジティブ・アクションに関する情報提供を実施。
- ④使用者団体や労働組合などと連携して、男女間格差の「見える化」をするための支援ツールの作成・普及。
- ⑤ポジティブ・アクション情報ポータルサイト (<http://www.positiveaction.jp/>) において、各企業のポジティブ・アクションの取組など各種情報を幅広く提供するとともに、企業が自社の女性の活躍推進の状況を自己診断できるシステムを運営。
- ⑥女性労働者が就業を継続していけるような環境づくりを促進するため、メンター制度の導入及びロールモデル育成のためのマニュアルを作成・普及。



ポジティブ・アクション普及促進のためのシンボルマーク「きらら」

「機会均等推進責任者」をご選任ください

厚生労働省では、ポジティブ・アクションの促進を図るため、各事業所において人事労務管理の方針の決定に携わる方を「機会均等推進責任者」として選任いただくようお願いしています。「機会均等推進責任者」の方には、各種セミナーの開催案内をはじめ各種資料や行政情報、先進事例の紹介などを一早くお届けします。

詳細はこちらをご覧ください。

http://www.mhlw.go.jp/general/seido/koyou/danjokintou/dl/danjyokoyou_u.pdf

厚生労働省のポジティブ・アクション関連サイト

女性の活躍推進宣言コーナー

(<http://www.positiveaction.jp/declaration/>)

厚生労働省のポジティブ・アクション普及促進に賛同する企業として、経営トップに自社の女性活躍推進について宣言していただくコーナーです。



ポジティブ・アクション応援サイト

(<http://www.positiveaction.jp/pa/index.php>)

企業のポジティブ・アクションの取組を応援するため、全国のような企業が実際に取り組んでいる事例を業種や規模別に実名で紹介しています。



8 派遣先にも男女雇用機会均等法は適用されます

労働者派遣が行われる場合においては、派遣先もまた、法に定められた妊娠・出産等を理由とする女性に不利益な取扱いの禁止(法第9条)、セクシュアルハラスメント対策(法第11条)や母性健康管理措置(法第12条、第13条)についての規定が適用されます。

2 育児・介護休業法の概要

【子が1歳未満の方が利用できる制度】

1 育児休業制度（法第5条～第9条の2）

従業員は、事業主に申し出ることにより、子の1歳の誕生日の前日まで、原則1回に限り、育児休業をすることができます。

I. 育児休業の特例～パパ・ママ育休プラス～

両親がともに育児休業をするなど一定の要件を満たす場合は、原則1歳までから1歳2か月までに育児休業期間を延長できます [ただし、育児休業を取得できる日数は（女性の場合は産後休業と育児休業を合計した日数）は1年間が限度です。]。

II. 1歳6か月までの育児休業の延長

子が1歳以降、保育所になれないなど一定の要件を満たす場合は、子が1歳6か月に達するまでの間、育児休業を延長することができます。

<対象となる従業員>

～期間雇用者（パート、派遣、契約社員など雇用期間の定めのある労働者）でも、一定の要件を満たす場合は、育児休業をすることができます！！～

- 原則として1歳未満の子を養育する全ての男女従業員（日々雇用者を除く。）が対象となります。ただし、勤続年数1年未満の従業員など、一定の従業員については、労使協定がある場合には、対象となりません。
- 期間雇用者の場合、申出時点において以下のいずれにも該当する従業員が対象となります。
 - ①同一の事業主に引き続き雇用された期間が1年以上であること
 - ②子の1歳の誕生日以降も引き続き雇用されることが見込まれること（子の2歳の誕生日の前々日まで労働契約期間が満了し、更新されないことが明らかな者を除く。）
- 1歳6か月までの育児休業の対象となるのは、以下のいずれかの事由に該当する従業員です。
 - ①保育所に入所を希望しているが、入所できない場合
 - ②1歳以降子の養育をする予定であった配偶者が、死亡、負傷、疾病等の事情により子を養育することが困難になった場合

<手続>

- 育児休業の申出は、申出に係る子の氏名、生年月日、従業員との続柄、休業開始予定日及び休業終了予定日を明らかにして、原則として1か月前（1歳から1歳6か月までの育児休業については、2週間前）までに、書面等により事業主に申し出る必要があります。
- 育児休業の申出があった場合、事業主は、①育児休業申出を受けた旨、②育児休業の開始予定日及び終了予定日、③育児休業を拒む場合には、その旨及びその理由、を従業員に速やかに通知しなければなりません。

【子が3歳未満の方が利用できる制度】

2 短時間勤務制度（所定労働時間の短縮措置）（法第23条）

事業主は、3歳未満の子を養育する従業員について、従業員が希望すれば利用できる短時間勤務制度を設けなければなりません。

- 短時間勤務制度は、1日の所定労働時間を原則として6時間（5時間45分から6時間まで）とする措置を含むものとしなければなりません。

<対象となる従業員>

短時間勤務制度の対象となる従業員は、以下のいずれにも該当する男女労働者です。

- ① 3歳未満の子を養育する従業員であって、短時間勤務をする期間に育児休業をしていないこと。
- ② 日々雇用される従業員でないこと。
- ③ 1日の所定労働時間が6時間以下でないこと。
- ④ 労使協定により適用除外とされた従業員でないこと。

以下のア)～ウ)の従業員は、労使協定により適用除外とされる場合があります。

ア) 当該事業主に引き続き雇用された期間が1年に満たない従業員

イ) 1週間の所定労働日数が2日以下の従業員

ウ) 業務の性質又は業務の実施体制に照らして、短時間勤務制度を講ずることが困難と認められる業務に従事する従業員

※ このうち、ウ)については、実際に短時間勤務制度を講ずることが困難と認められる具体的な業務があり、その業務に従事する従業員がいる場合のみ適用除外とすることができます。

この場合、事業主は、代替措置として、以下のいずれかの制度を講じなければなりません。

(a) 育児休業に関する制度に準ずる措置、

(b) フレックスタイム制度、

(c) 始業・終業時間の繰り上げ・繰り下げ（時差出勤の制度）、

(d) 保育施設の設置運営その他これに準ずる便宜の供与

のいずれかの制度を講じなければなりません。

<手続>

短時間勤務制度の適用を受けるための手続は、就業規則等の定めによります。

こうした定めについては、事業主は、適用を受けようとする従業員にとって過重な負担を求めることにならないよう配慮しつつ、育児休業や所定外労働の制限など他の制度に関する手続も参考にしながら適切に定めることが必要です。

3 所定外労働の制限（法第16条の8）

3歳未満の子を養育する従業員が申し出た場合には、事業主は、その従業員を、所定労働時間を超えて労働させてはなりません。

<対象となる従業員>

原則として3歳未満の子を養育する全ての男女労働者（日々雇用者を除く。）が対象となります。ただし、勤続年数1年未満の従業員と週の所定労働日数が2日以下の従業員については、労使協定がある場合には、対象となりません。

<手続>

所定外労働免除の申出は、1回につき、1か月以上1年以内の期間について、開始予定日と終了予定日等を明らかにして、開始予定日の1か月前までに、事業主に申し出る必要があります。また、この申出は何回でもすることができます。

【子が小学校就学前までの方が利用できる制度】

4 子の看護休暇（法第16条の2、第16条の3）

小学校就学前までの子を養育する従業員は、事業主に申し出ることにより、小学校就学前までの子が1人であれば年に5日まで、2人以上であれば年に10日まで、1日単位で休暇を取得することができます。子の看護休暇は、病気やけがをした子の看護を行うためや、子に予防接種または健康診断を受けさせるために利用することができます。

<対象となる従業員>

原則として、小学校就学前までの子を養育する全ての男女労働者（日々雇用者を除く。）が対象となります。ただし、勤続年数6か月未満の従業員と週の所定労働日数が2日以下の従業員については、労使協定がある場合には、対象となりません。

<手続>

子の看護休暇の申出は、休暇を取得する日や理由等を明らかにして、事業主に申し出る必要があります。子の看護休暇の利用については緊急を要することが多いことから、当日の電話等の口頭の申出でも取得を認め、書面の提出等を求める場合は、事後となっても差し支えないこととすることが必要です。

5 法定時間外労働の制限（法第17条）

小学校就学前までの子を養育する従業員が申し出た場合には、事業主は、1か月24時間、1年150時間を超える時間外労働をさせてはなりません。

<対象となる従業員>

原則として、小学校就学までの子を養育する全ての男女労働者（日々雇用者を除く。）が対象となります。ただし、勤続年数1年未満の従業員と週の所定労働日数が2日以下の従業員については対象となりません。

<手続>

法定時間外労働の制限の申出は、1回につき、1か月以上1年以内の期間について、開始予定日と終了予定日等を明らかにして、開始予定日の1か月前までに、事業主に申し出る必要があります。また、この申出は何回もすることができます。

6 深夜業の制限（法第19条）

小学校就学前までの子を養育する従業員が申し出た場合には、事業主は、その従業員を深夜（午後10時から午前5時まで）において労働させてはなりません。

<対象となる従業員>

原則として、小学校就学までの子を養育する従業員（日々雇用者を除く。）が対象となります。ただし、勤続年数1年未満の従業員など、一定の従業員については対象となりません。

<手続>

深夜業の制限の申出は、1回につき、1か月以上6か月以内の期間について、その開始予定日及び終了予定日等を明らかにして、制限開始予定日の1か月前までに、事業主に申し出る必要があります。また、この申出は何回もすることができます。

7 その他の両立支援措置（努力義務）（法第24条第1項）

事業主は、小学校就学前までの子を養育する従業員について、①フレックスタイム制度、②時差出勤の制度、③事業所内保育施設の設置・運営その他これに準ずる便宜の供与、のいずれかの措置を講ずるよう努めなければなりません。

8 転勤に対する配慮（法第26条）

事業主は、従業員に就業場所の変更を伴う配置の変更を行おうとする場合に、その就業場所の変更によって子育てが困難になる従業員がいるときは、当該従業員の子育ての状況に配慮しなければなりません。

9 不利益取扱いの禁止（法第10条、第16条の4、第16条の9、第18条の2、第20条の2、第23条の2）

事業主は、育児休業など(1)～(6)までの制度の申出や取得を理由として、解雇などの不利益な取扱いをしてはなりません。

介護のための両立支援制度

1 介護休業（法第11条～第15条）

従業員は、事業主に申し出ることにより、対象家族1人につき、要介護状態に至るごとに1回、通算して93日まで、介護休業をすることができます。

- 「要介護状態」とは、負傷、疾病又は身体上若しくは精神上の障害により、2週間以上の期間にわたり常時介護を必要とする状態をいいます。
- 「対象家族」とは、配偶者（事実上婚姻関係と同様の事情にある者を含む。）、父母及び子（これらの者に準ずる者として、従業員が同居し、かつ、扶養している祖父母、兄弟姉妹及び孫を含む。）、配偶者の父母です。

<対象となる従業員>

～期間雇用者（パート、派遣、契約社員など雇用期間の定めのある労働者）でも、一定の要件を満たす場合は、介護休業をすることができます！！～

- 原則として要介護状態の家族を介護する全ての男女労働者(期間雇用者及び日々雇用者を除く。)が対象となります。ただし、勤続年数1年未満の従業員など、一定の従業員については、労使協定がある場合には、対象となりません。
- 期間雇用者の場合、申出時点において以下のいずれにも該当する従業員が対象となります。
 - ①同一の事業主に引き続き雇用された期間が1年以上であること。
 - ②休業開始日から93日を経過する日以降も引き続き雇用されることが見込まれること（93日経過した日の1年後までに労働契約期間が満了し、更新されないことが明らかな者を除く。）。

<手続>

- 介護休業の申出は、①休業に係る対象家族が要介護状態にあること、②休業開始予定日及び休業終了予定日、を明らかにして、原則として2週間前までに、書面等により事業主に申し出る必要があります。
- 介護休業の申出があった場合、事業主は、①介護休業申出を受けた旨、②介護休業の開始予定日及び終了予定日、③介護休業を拒む場合には、その旨及びその理由、を従業員に速やかに通知しなければなりません。

2 介護のための短時間勤務制度等の措置（法第23条第3項）

事業主は、要介護状態にある対象家族を介護する従業員が希望すれば利用できる短時間勤務制度その他の措置（短時間勤務制度等の措置）を講じなければなりません。

- 事業主は、短時間勤務制度等の措置として、以下のいずれかの措置を講じなければなりません。
 - ①短時間勤務制度
 - ②フレックスタイム制度、
 - ③始業・終業時刻の繰り上げ・繰り下げ（時差出勤の制度）、
 - ④介護サービスを利用する場合、従業員が負担する費用を助成する制度その他これに準ずる制度
- これらの制度は、要介護状態にある対象家族1人につき、介護休業をした日数と合わせて少なくとも93日間は利用することができるようにする必要があります。

<対象となる従業員>

短時間勤務制度等の措置の対象となる従業員は、日々雇用される従業員以外の全ての男女労働者です。ただし、勤続年数1年未満の従業員と週の所定労働日数が2日以下の従業員については、労使協定がある場合には、対象となりません。

<手続>

短時間勤務制度の適用を受けるための手続は、基本的に就業規則等の定めによります。

こうした定めについては、事業主は、従業員が就業しつつ家族を介護することを実質的に容易にする内容のものとするとともに、短時間勤務制度等を利用する従業員の待遇に関する事項を定め、従業員に周知するための措置を講ずるように配慮しなければなりません。

3 介護休暇（法第16条の5～第16条の6）

要介護状態にある対象家族の介護その他の世話をを行う従業員は、事業主に申し出ることにより、対象家族が1人であれば年に5日まで、2人以上であれば年に10日まで、1日単位で休暇を取得することができます。

- 「その他の世話」とは、ア) 対象家族の介護、イ) 対象家族の通院等の付き添い、対象家族が介護サービスの提供を受けるために必要な手続きの代行その他の対象家族に必要な世話をいいます。

<対象となる従業員>

原則として、対象家族を介護する全ての男女労働者（日々雇用者を除く。）が対象となります。ただし、勤続年数6か月未満の従業員と週の所定労働日数が2日以下の従業員については、労使協定がある場合には、対象となりません。

<手続>

介護休暇の申出は、休暇を取得する日や理由等を明らかにして、事業主に申し出る必要があります。介護休暇の利用については緊急を要することが多いことから、当日の電話等の口頭の申出でも取得を認め、書面の提出等を求める場合は、事後となっても差し支えないこととすることが必要です。

4 法定時間外労働の制限（法第18条）

要介護状態にある対象家族の介護を行う従業員が申し出た場合には、事業主は、1か月24時間、1年150時間を超える時間外労働をさせてはなりません。

<対象となる従業員>

原則として、対象家族の介護を行う全ての男女労働者（日々雇用者を除く。）が対象となります。ただし、勤続年数1年未満の従業員と週の所定労働日数が2日以下の従業員については対象となりません。

<手続>

法定時間外労働の制限の申出は、1回につき、1か月以上1年以内の期間について、開始予定日と終了予定日等を明らかにして、開始予定日の1か月前までに、事業主に申し出る必要があります。また、この申出は何回もすることができます。

5 深夜業の制限（法第20条）

要介護状態にある対象家族の介護を行う従業員が申し出た場合には、事業主は、その従業員を深夜（午後10時から午前5時まで）において労働させてはなりません。

<対象となる従業員>

原則として、対象家族の介護を行う全ての男女労働者（日々雇用者を除く。）が対象となります。ただし、勤続年数1年未満の従業員など、一定の従業員については対象となりません。

<手続>

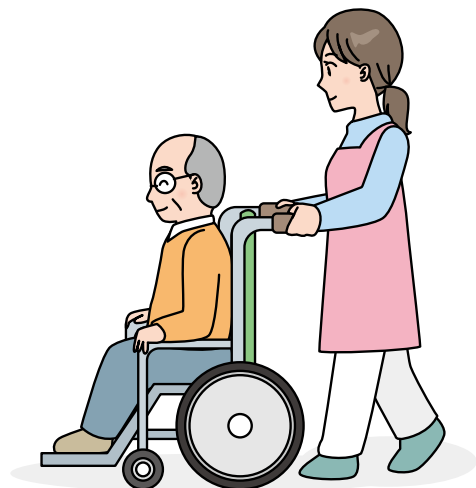
深夜業の制限の申出は、1回につき、1か月以上6か月以内の期間について、その開始予定日及び終了予定日等を明らかにして、制限開始予定日の1か月前までに、事業主に申し出る必要があります。また、この申出は何回もすることができます。

6 転勤に対する配慮（法第26条）

事業主は、従業員に就業場所の変更を伴う配置の変更を行おうとする場合に、その就業場所の変更によって介護が困難になる従業員がいるときは、当該従業員の介護の状況に配慮しなければなりません。

7 不利益取扱いの禁止（法第16条、第16条の7、第18条の2、第20条の2、第23条の2）

事業主は、介護休業など（1）～（5）までの制度の申出や取得を理由として、解雇などの不利益な取扱いをしてはなりません。



3 紛争解決の援助等

男女雇用機会均等法や育児・介護休業法に基づくご相談は、都道府県労働局雇用均等室において受け付けています。紛争が生じた場合や、法違反については以下によりますが、紛争が生じていない場合であっても、疑問やお困りのことがありましたら、どうぞご相談ください。

1 労働者と事業主の間に紛争が生じた場合は、解決のため援助・調停が受けられます（男女雇用機会均等法第17条・第18条、育児・介護休業法第52条の4・第52条の5）

労働者と事業主との間で男女均等取扱いや育児休業制度等に関する紛争が生じた場合、紛争の解決のため、法に基づく労働局長による紛争解決の援助（男女雇用機会均等法第17条、育児・介護休業法第52条の4）及び紛争調整委員会による調停（男女雇用機会均等法第18条、育児・介護休業法第52条の5）が受けられます。

<援助・調停の対象となる紛争>

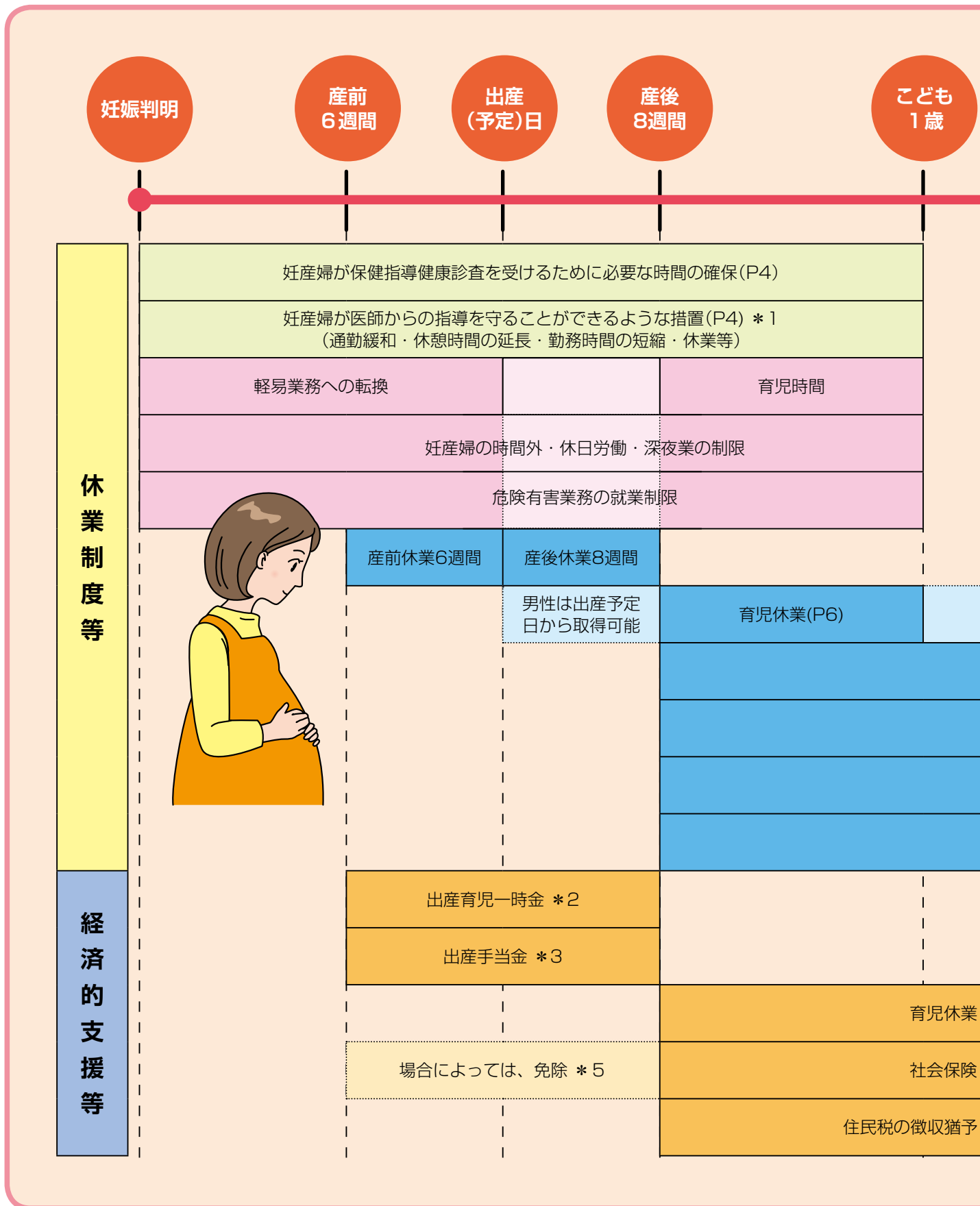
- 男女雇用機会均等法第5条～7条、第9条、第11条第1項、第12条及び第13条第1項に定める事項についての労働者と事業主との間の紛争。
※第5条の募集・採用については、調停の対象にはなりません。
- 育児・介護休業法第2章から第8章、第23条、第23条の2及び第26条に定める事項についての労働者と事業主との間の紛争。
- 労働局長による紛争の解決の援助
都道府県労働局長が、両当事者の事情をよく聴取し、問題解決に必要な具体策の提示（助言・指導・勧告）をすることにより紛争の解決を図る制度です。
- 紛争調整委員会による調停
弁護士や大学教授等の労働問題の専門家である調停委員が、両当事者の事情をよく聴取し、紛争解決の方法として調停案の受諾を勧告することにより紛争の解決を図る制度です。

2 法違反がある場合は指導等が行われます（男女雇用機会均等法第29条・第30条・第33条、育児・介護休業法第56条・第56条の2・第68条）

法違反となる事実の有無を確認する必要があるとき、厚生労働大臣は事業主に対して報告を求めることができます。法違反がある場合には助言、指導、勧告が行われ、勧告に従わない場合は企業名公表の対象となります。

また、厚生労働大臣の報告の求めに応じなかった、あるいは虚偽の報告を行った事業主に対しては、20万円以下の過料が科されることとなります。

4 妊娠から産休、育児休業、復職後の流れ



(これらの内容は、ほとんどの母子健康手帳にも掲載されています)

こども
1歳2か月

こども
1歳6か月

こども
3歳

就学

- * 1 医師からの指導内容を会社に伝えるための「母性健康管理指導事項連絡カード」があります
「母性健康管理指導事項連絡カード」は、厚生労働省ホームページ
(<http://www2.mhlw.go.jp/topics/seido/josei/hourei/20000401-25-1.htm>)
からダウンロードすることができます。また、ほとんどの母子健康手帳に様式が記載されているので、それをコピーして使うことができます
- * 2 出産費用の負担軽減のため子一人につき 42 万円支給されます
- * 3 産前・産後休業期間の生活費補填のため 1 日につき標準報酬の 3 分の 2 が支給されます
- * 4 一定の要件を満たすと、休業開始時賃金月額×支給日数×50%が支給されます
- * 5 平成 24 年 8 月 22 日から 2 年を超えない範囲内で政令で定める日から施行されます
- * 6 就業規則等で 3 歳までの育児休業制度が定められ、休業している場合です
- * 7 一時に納税することが困難であると地方団体の長が認める場合に限られます

場合によっては
取得可能

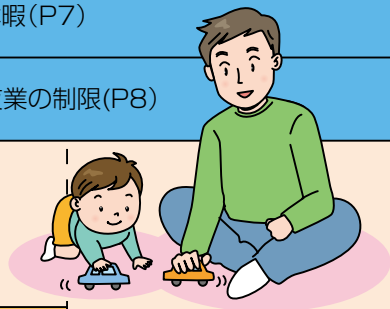
場合によっては
取得可能

所定労働時間の短縮措置(短時間勤務)等(P6)

所定外労働の制限(P7)

子の看護休暇(P7)

時間外労働・深夜業の制限(P8)



給付金 * 4

料の免除
場合によっては、免除 * 6

(育児休業期間中 1 年以内) * 7

男女雇用機会均等法、育児・介護休業法の詳細に関するお問い合わせは

都道府県労働局雇用均等室へ

[受付時間 8時30分～17時15分(土・日・祝日・年末年始を除く)]

都道府県	電話番号	都道府県	電話番号	都道府県	電話番号
北海道	011-709-2715	石川	076-265-4429	岡山	086-224-7639
青森	017-734-4211	福井	0776-22-3947	広島	082-221-9247
岩手	019-604-3010	山梨	055-225-2859	山口	083-995-0390
宮城	022-299-8844	長野	026-227-0125	徳島	088-652-2718
秋田	018-862-6684	岐阜	058-245-1550	香川	087-811-8924
山形	023-624-8228	静岡	054-252-5310	愛媛	089-935-5222
福島	024-536-4609	愛知	052-219-5509	高知	088-885-6041
茨城	029-224-6288	三重	059-226-2318	福岡	092-411-4894
栃木	028-633-2795	滋賀	077-523-1190	佐賀	0952-32-7218
群馬	027-210-5009	京都	075-241-0504	長崎	095-801-0050
埼玉	048-600-6210	大阪	06-6941-8940	熊本	096-352-3865
千葉	043-221-2307	兵庫	078-367-0820	大分	097-532-4025
東京	03-3512-1611	奈良	0742-32-0210	宮崎	0985-38-8827
神奈川	045-211-7380	和歌山	073-488-1170	鹿児島	099-222-8446
新潟	025-288-3511	鳥取	0857-29-1709	沖縄	098-868-4380
富山	076-432-2740	島根	0852-31-1161		

男女雇用機会均等法に関する情報は、こちら

http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyoukintou/danjokintou/index.html

育児・介護休業法に関する情報は、こちら

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/pamphlet/index.html#pam-02>

厚生労働省のホームページでは、メールによるご質問も受け付けています。

<https://www-secure.mhlw.go.jp/getmail/getmail.html>